

ヴィンチェンツォ・ガリレーイのザルリーノ批判
—ピュタゴラス主義の変容—

大愛 崇晴

後期ルネサンスにおけるもっとも指導的な音楽理論家のひとり、ジョゼッフォ・ザルリーノ（1517-90）は、プトレマイオスの音律「ディアトノン・シュントノン」を擁護するが、それは、1から6までの整数を意味する「セナーリオ」による数比によって構成される純正律であった。ザルリーノにとって「セナーリオ」は、神の完全性を体現する「自然」に支えられた形而上学的な含意を持つものであった。この考え方は、中世における数学的四科（クアドリヴィウム）の持つピュタゴラス主義的伝統を反映していると言える。

ヴィンチェンツォ・ガリレーイ（1520年代-1591）は、その著書『古代の音楽と現代の音楽の対話』（1581）、そして、後年には『ジョゼッフォ・ザルリーノ氏の諸著作をめぐる論考』（1589）において、ザルリーノが主張する純正律の非実用性を経験主義的立場から攻撃した。ガリレーイが現実にも用いられている音律として擁護したのは、今日の平均律と同じ考え方によるアリストクセノスの音律体系である。この体系では、音楽の基体は離散量、すなわち数ではなく、無限に分割可能な連続量であるとされ、それゆえ、伝統的なピュタゴラス主義的音楽理論が行ってきたように、音程は数比によって理性的に決定されることはなく、可変的で、もっぱら感覚的な対象として見なされる。

しかし、ガリレーイがアリストクセノスの体系を擁護するのは、その単純明快さのためのみであった。ザルリーノ同様、彼もまた純正律を志向していたが、やはりそれが実現困難であることを明確に認めている。ガリレーイにとって、音楽とは人為的なものであり、ザルリーノの理論が依拠している超越論的な「自然」とは関わらない。当論文は、このように形而上学的な契機を付与されていた中世以来の「音楽」の概念が、もっぱら人為的な営みとして見なされていく過程を、ガリレーイのテキストを通じて検討したものである。